HOKKAIDO UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| Title | 討論 |
| Author(s) | 近藤, 智彦; 斉藤, 巧弥; 満島, てる子 他 |
| Description | 公開シンポジウム「『LGBT』はどうつながってきたのか？」. 2018年10月8日. 北海道大学文系共同講義棟（軍艦講堂）2階8番教室, 札幌市. |
| Issue Date | 2019-03-31 |
| Doc URL | https://hdl.handle.net/2115/74610 |
| Type | conference paper |
| File Information | LGBT2018-7_discussion.pdf |

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

# 討　論

**（近藤）** それでは、後半の討論を始めたいと思います。

三名の先生のご講演は、テーマ的にもかなり幅広い内容にわたるものでした。したがいまして、それぞれのお話がまさにどのように「つながる」のか、まだ見えにくいところがあるかと思います。そこで、この時間の前半は、斉藤巧弥から各先生に質問を投げかけることで、その「つながり」がもう少し分かるようにしたいと考えております。

**（斉藤）** 私は、北海道大学大学院国際広報メディア・観光学院の博士後期課程に所属しております、斉藤巧弥と申します。堅くなりすぎず気軽に進めていこうと思っていますので、よろしくお願いします。

**（満島）** 私は、すすきのの外れ、「7 丁目のパウダールーム」という女装バーで店長をやっております、北海道大学大学院文学研究科卒の満島てる子と申します。

皆さんが質問用紙に熱心に書いてくださって、情報量がすごいことになっています。まずはその整理をしてまいります。その間、斉藤君がお三方に質問をしていくという形で進めたいと思います。

**（斉藤）** 本シンポジウムのテーマは LGBT の「つながり」ということですが、近藤さんからご紹介があったように、ふだんの議論の中ではとらえられない、さまざまなつながりを取り上げて論じていく、というのがねらいです。私からは、皆さんの発表の関係性が分かりやすくなるような質問をしていきたいと思います。

特に「つながり」ということで私が念頭に置いているのは、清水さんと鈴木さんのお話にあったような、政治的な、社会運動的な文脈におけるつながりです。そしてもう一つは、石田さんがお話しになった ── こういう言葉が適切かどうか分からないのですけれども ──「アンダーグラウンド」的なものとして考えられてしまう、私的な領域として隠されてしまうようなつながりです。この二つのつながりを取り上げて、それらが議論としてどのようにつながるのか、そこを考えてみたいと思います。以上のような点から、皆さんに一つずつ質問をしていきたいと思います。

最初に、清水さんにお聞きします。清水さんには主に、英語圏でのクィア・アクティビズムやクィア理論の中でのつながりの歴史や、議論の移り変わりについてお話ししていただきました。そういう中で、石田さんが議論されていたハッテン場についての話題や、そうした私的な、性的な話題についてはどのように議論されてきたのでしょうか。

**（清水）** 英語圏というか、私が知っているのはアメリカなのですけれども、アメリカではハッテン場に相当するものの存在に関しては、ゲイ・スタディーズではなくて、取り締まる側がかなり早い時期に研究を始めます。調査が行われるのです。研究者も一緒になってそういう調査が行われ、その後も、社会学的なというか文化人類学的なアプローチで、どういうことが行われていたのかという調査があります。それを基にして、例えばゲイ男性の性的なつながりというものが、その後のゲイ・コミュニティであったり、そこを一つのベースとするクィア・コミュニティやクィア理論の考え方などにどういう影響を与えてきたのかという話はあります。

石田さんのお話に出てきていたハッテン場で「裸のつきあい」があって、人種とか階級の違う人たち


斉藤巧弥

が出会うという話は、英語圏のクィア・スタディーズとかゲイ・スタディーズの中でははっきりと何回か言われていることです。同時に、そこの可能性が追求されたり、それに対する批判が行われています。

それから、「性的な空間」ということに関しては，ゲイ男性とレズビアン女性の中で大きく違っていて、女性の性的な空間というものに関しては、圧倒的にまだ研究が少ないと言われています。私もあまり見ていません。それこそ私的な空間に集まって、パーティーなどの形で性的な交流が行われていたのではないかという話があり、そこは一つ違うということです。

それから、特にSMダイク系の人の話などを読んでいると、SMコミュニティはSMのほうが重要なので、必ずしもゲイとレズビアンが分かれていないということがあります。そちらはそちらで、一般的なハッテン場や一般的なハウスパーティーとはまた違うコミュニティを持っています。そういう話は色々と出てきていたように思います。

**（斉藤）** ありがとうございます。次に、石田さんにお聞きします。清水さんのお話によると、アメリカのクィア・スタディーズなどにおいては、コミュニティとしての機能を持つ性的な空間について、様々な研究があるということですが、日本においては類似する研究がほとんど行われていないという印象が私にはあります。なぜ、「日本」という文脈においてそういうものが論じられてこなかったのでしょうか。

**（石田）** 一つには、ゲイ雑誌や会員誌などの資料は大変豊富にあり、仮にハッテン場という風にテーマを決めても、多過ぎてどこまで研究の範囲とすれば分からない、ひるんでしまう、というところがあると思います。同じように雑誌研究をやっている斉藤さんもよくご存じかと思うのですけれども、ゲイ男性に関しての資料は多過ぎて、一つのテーマをやるとしても沼のような感じですよね。（笑い） なので、どれをやるにも手間と時間がかかってしまい、人様にお見せできるようなちゃんとしたパッケージへとまとまるまでには、すごく時間もかかるということがあると思います。

それから、研究者として残れるかどうかという点で言えば、大きな政治に結びつかないような、カルチャー面に注目する研究はサバイブしにくく、手をつけづらい状況があるんじゃないでしょうか。政治的に正しかったり、権利に結びついたりする研究のほうがポストも得やすいというところは、実際問題、あると思っています。

**（斉藤）** 性的なことを研究対象にするとサバイブしにくいということは、やはりあると思います。この背景にはLGBTの問題に限らず、性的なことをどれほどタブー視するのか、そして性的な話がいかに政治的なのかという点に関して、日米社会で共有されている認識の違いもあるのではないでしょうか。そのため、こうしたことを公の場で話すこと自体に批判的な視線を注いだり、嫌悪感を抱くような当事者がいるのも現状ではないかと思われます。

鈴木さんには、昨今の政治的、公的な場における差別的な発言についてお話しいただきましたが、このようにハッテン場などの性的な話題について議論するというのは、LGBTの話をいい方向に進めることとは逆行するようにも思われます。というのも、いまだに政治家の中に、LGBTをただの性的な趣味だと言ったりする人がいる中では、そうした人々のイメージを補強してしまう可能性もあります。そうした中、こうした場でハッテン場などについて議論することの意義について、お考えをお聞きかせください。

（鈴木） 確かに、石田さんがお話しされたようなことを公開の場で書いたり、しゃべったりするということは、これまであまりなされてこなかったと思います。それはなぜかというと、性的な行動というのがすごく地下化していて、アンダーグラウンド ── そう斉藤君は言っていましたけれども ── になってしまっているということです。それはなぜかというと、それは表に出してはいけないことだし、隠しておかなければいけないことだし、ないことにしなくてはいけないことだとされてきた。それはいかにこの世の中が同性愛的な関係というのをタブーにし、公共空間から排除してきたのかということの象徴だと思うのです。そういう意味では、こういうことを議論できるようになった、あるいはするようになったというのはすごくいいことで、性指向に対する差別をなくしていくうえでは、むしろそれはいったんやらなければいけない作業だと、私は思います。

（斉藤） みなさん、ありがとうございました。会場の皆さんから頂いた質問の整理が終わったようです。それではここで、質疑応答に移りたいと思います。

（満島） それでは、司会を替わり、皆さんのご質問を先生方に投げかけていきたいと思います。

感想を含めて、色んな質問が来ております。その中で「ああ、すごいわ！」と思ったのが、「ゲイ当事者の母親です。石田先生、ハッテン場のこと、とても心配していました。淡々と詳しく説明していただき、ありがとうございました」という（笑い）、感謝のお便りです。そういうのも追々紹介していきたいと思います。

では、まずは発表順ということで、鈴木先生に質問させていただきます。

昨今非常に取りざたされている政治的な関係の発言や、某出版社に関する記事について、質問が寄せられています。

「杉田さんや小川氏と、どうやって闘っていったらいいのか」ということで、鈴木先生だけではなくて、清水先生や石田先生にも聞いてみたい、という声が届いています。その中でもすごく印象的だったのは、「『生産性』というものについて、考えてしまうところがある」というご質問です。読み上げます。

「現政権は、産めよ増やせよ、家族重視の方向性にあります。今後、家族というものについて、どのようなスタンスで考えていけばよいのでしょうか」

「また、一人の人間の中にも、男性性、女性性があると思います。どういうつながりを模索していけばいいのでしょうか」

というご質問ですが、「家族」というワードから出てくる「生産性」というのは、私たちの体感として慣れ親しんでいるものではあるような気がします。

別のご質問も来ています。

「生産性というのは、人間個人自体から生じるものであるとは思います。だから、LGBT の人たちにも生産性があると思うのだけれども、例えば子供を産むということを考えると、未来の生産性があるかないかについては、やはり『未来の生産性がある』とは論理的には言えないのではないか。どう考えますか」

ここで「生産性」というワードについて、鈴木先生のお考えをお教えください。

（鈴木） 杉田さんが使っている「生産性」の意味は、要するに子供を産むかどうかということだけです。そのことによって税金を投入するかどうかの可否を決めるという発想は、根本的に間違っていると思いますので、強く批判すべきだと思います。

この論考が出てきたときに、「LGBT だって、例えばレズビアンのカップルは子供が産めるし、代理

母出産をしてもらえばゲイだって子供が産めるのだから、生産性がある」という議論をする人がいました。あるいは、「養子をもらえば同性カップルだって子供を育てることができる。だから生産性がある」と反論をしている人もいるのですが、私はそうした議論に乗るのは非常に危険だと思います。それはLGBT だけではなくて、障がいを持っている方、あるいは子どもを産みたくないと思っている方もおられるわけで、そういうことを理由に、税金を投下するかどうかの可否を決めるという発想自体は間違っているので、生産性があるかどうかという議論に乗るのは、すごく危険だと思います。

しかも私が重要だと思うのは、国会議員というのは法律を作り、予算を決める権限を持っている権力者だということです。そういう人が「予算をこう使うべき」だと言っていることの重み……これは、一般人が居酒屋で、あるいは与太話で言っていることではないのです。公の雑誌で、自民党の国会議員が書いている。しかもそれは、比例名簿に載っている人であり、おまけに首相が名簿の１位に据えているのです。杉田議員とはそういう人であるということは、押さえておく必要があります。

他方で、杉田さんや小川さんの議論をいつまでも相手にして反論していると、あれがあたかも議論の価値がある文章であるかのように誤解されることを、私は恐れます。だから無視すべきだという誘惑にも駆られるのです。小川さんの文章は「便所の落書き」と言われていますけれども（笑い）、私は便所の落書き以下だと思いますよ。「それは便所の落書きに失礼だ」という人もいるのです。（笑い）小川さんのはまだ無視してもいいかもしれないけれども、杉田さんの場合はやはり、国会議員ですから性質が違います。彼女の議論については、これからも継続して批判していくべきだと思います。そうしないと、あの議論に乗っかるような人が出てきます。そして、そういう人は一定程度います。ですから、彼女の議論は偶然出てきた孤立したものではありません。ある一定の支持層があり、しかもそれは政権のかなり中枢ともつながっているということも考えると、許してはいけないと思います。

**（満島）**「便所の落書き」というのは、強烈なワードでしたね。（笑い）　税金が動くか動かないかという経済性みたいなところが、今回の杉田議員問題についてはすごく大きかったという印象を私も抱いています。ですから、鈴木先生の言われることはなるほどと思います。また、経済性ということを考えると、この国が資本主義国であるということにも目が向いてくるような気がします。そこで、そもそも資本主義とか社会的な構造のあり方を考えていくということで、クィア理論というのが非常に大きな役割を果たしてきたように思います。そのつながりから、松浦氏や杉田議員について清水先生に向けた質問がいくつか届いています。

「杉田議員は『LGBT は特権を求めている』と言うが、杉田議員や松浦氏の発言について、クィア理論からはどのようなことが言えるのでしょうか」というご意見が多数届いていますが、清水先生はいかがお考えでしょうか。

**（清水）**　正直、その点については、鈴木先生が言われたこととそんなに大きく違うはずはなく、「だめだと思います」としか言いようがありません。生産性の話についても、杉田さんはもちろん、「子供を産む」ということに絞って話しています。それはそれでいいのですけれども、それを「生産性」という言葉で話したわけです。そこで、彼女の議論を擁護しようとする人たちは、「杉田議員は、子供を産むか産まないかということだけについて話しているのであって、生産性について話しているわけではない」と言うのですが、だとしてもそれでどこが問題ないという事になるのかは、よく分からない。ただやはり、そこで生産性という言葉が出てきたということは非常に重要で、杉田さんの“論考”が出たときに、非常に強く反発して批判をしていた人たちというのは、いわゆる LGBT とかクィア系の人に加えて、ディ

サビリティ系の人たちがいっぱいいました。「これはとても看過できない」という意見を、ディサビリティ運動にかかわっている周りの人や研究者からもいくつも聞いています。そこを忘れるべきではありません。

今回の話は子供を産む、産まないという話ではありませんし、そこに税金を投入されるかされないかという話ではありません。というか、正確にはそれも確実にそうではあるのですけれども、同時に、それだけではなくて、私たちの社会が考えている「生産性」、つまりこういう人たちは何かを生み出している。世の中に貢献しているからこの人たちはいてもいい。ここには税金を使ってもいい。だけどこの人たちは、私たちの社会が考える基準では何も生み出していない。役に立っていないからここには税金を使わなくてもいい ——と言うわけですが、そういう分け方がまず問題だということです。そこはいくら強調してもし足りないところです。

それから、杉田さんにしても、小川さんは特にそうですけれども、正直、「トンデモ」なのです。ほぼトンデモなのだけれども、トンデモが繰り返されることによって、あたかもそれがトンデモではないように見えて来ることがあります。だからまず、そのトンデモをどうにかしなくては、とどうしても思ってしまう。そして、それによって、議論全体の中心がずれるということがあると思っています。これは本当に、注意しなくてはいけない。例えば、とりあえずヘイトスピーチはだめ、という話に集中しているうちに、「在日朝鮮人とか在日韓国人に対してのヘイトスピーチは許せないけれども、朝鮮人学校の授業料無償化というのはまた別の問題である」といった意見が出てくる。在特会が出てきたときの問題は、一つはそこだと思います。ものすごく露骨な差別をする人たちが出てくると、多少の制度的な差別については、「そこまでは言わなくていいのではないか。もっとすごくひどいところをまずどうにかしなくてはいけない」と思い始める傾向があります。もちろんどうにかしなくてはいけないのですけれども、でもそれをやると、言説の中心がぶれてしまう。そうでなくて、「ヘイトスピーチはもちろんだめだけれども、それ以外の制度的な差別もだめ」、あるいは「小川榮太郎氏はもちろんだめだけど、あらゆるところが異性愛中心で、あるいはシスジェンダー中心で動いている日本の制度自体がだめ」という、そこを忘れないようにするのは、すごく重要だと思います。

**（満島）**「トンデモ」という話が出てきたのですけれども、それに関連づけて話を広げていきたいと思います。

今回、杉田議員の話が一般に広まったのは、皆さんがものすごくSNSを使うようになったことと関係があるのではないかと思います。杉田議員が出ている一部のテレビ番組の動画が、SNSなどでものすごくたくさんのリツイートを経て、拡散したということもあると思うのです。ということで、SNSに関するご質問を読ませていただきます。

「社会運動としてのLGBTの背景には、多くの社会実験的なアクションと議論の積み重ねが前提として存在していると思うのですが、SNSを中心とした議論では、意図的・非意図的に過去の議論を無視した発言が主流を占めてしまい、結果としてより分断を深めているように思われます」

確かに、自分が思ったことをぱっと書いてしまう。それは別に理論に基づいたものではないにもかかわらず、それがどんどん広まって分断を深めていったところがあると思いますが、鈴木先生にこういう質問も来ています。

「鈴木先生がお話しになっていた、熊谷さんのナルシストとアクティビストの話ですが、ナルシストに該当するような人たちのSNS等での発言を見ていると、彼ら彼女らがアクティビストにはなれなかった人たちに見えて、賢さんたちアクティビストが負ける気がしないのですが、それでもナルシストたちと対

話をしようとする努力は、必要なのでしょうか」

鈴木先生、いかがでしょうか。


満島てる子

**（鈴木）** この杉田議員問題が起きてからのSNSを中心とする議論……と言えるレベルではないかもしれませんが、言説のやり取りを見ていて、対話も不能ではないかと思い始めています。AbemaTVのテレビ局が作ったツイッターには見出しがついていて、「話せば分かる」「対話をすれば一致点が見出せるのではないか」といったことが書いてあるのですが、到底無理ではないかという気がする人たちがいるのは、確かです。例えば権利を主張する、抗議をする、反対の声を上げる、あるいはマイノリティが権利を獲得していく、といったこと自体に、ネガティブな評価をしている人たちがいます。いわば「権利主張フォビア」とも言うべき、権利を主張すること自体を蔑む人たちがいますから、そういう人たちとはもう議論はできないという気がします。また悪いことに、そうした人たちは権力と近い関係にあるようなので、あながちバカにもできないのです。しかし、そうした人たちとは、まともな議論は事実上、無理だと思います。

実際、テレビで小川氏と議論しましたけれども、ほとんど議論がかみ合いません。いくら時間をかけても、あの人と詰めた議論をするのは、無理だと思いました。追い込んでいくと、「いや、自分はそういうことを言っていない」と言って逃げるのが常套手段なのです。つまり、議論が成り立つ人とそうでない人がいるというのは、残念ながら認めざるをえないのではないかと思います。

SNSが何か新しいものを生み出したというよりは、従来見えなかったものが可視化されているだけなのだろうとは思います。だからあまり気にしなくてもいいのかもしれません。分断の深さといいましょうか、基本的なところであまりにも考え方が違います。これは、「在日特権」などという言説にも表れているように、マイノリティが権利を獲得すること自体をだめだという人がいますから、そういう人たちとわれわれの権利運動の話は、やはりできません。これまでのマジョリティが作ってきた世の中を受け入れて生活することしか認めない、という人たちがいますので、それは手の施しようがありません。

**（満島）** SNSというのはどんな人も使っているという気がします。確かに、トンデモという人から有識者っぽい人まで色んな人が色んな発言をしているので、すごく難しいと思います。

さてここで、SNSとか杉田議員関係の話から、ハッテン場の話に飛びたいと思います。

石田先生に色んな質問が届いています。皆さん今回の発表をお聞きになって特に衝撃を受けたことでしょう、「ホモサウナ」にあった結婚式場（笑い）についての質問です。

「『ホモサウナ』にあった結婚式場は、何の目的で使われていたと思いますか」（笑い）　そして、ここからけっこう真面目な話なのですけれども、

「法的に結婚できないため結婚式を挙げられなかった、または一般の人に見られたくない、という思いなどは、関係していると思われますか」

確かに、結婚は法的にできないから結婚式場へ行って結婚写真を撮ってもらい、それでとりあえず結婚した気分を味わうだけなのですが、「でも私は幸せ」と言っている友達も私の周りにいて、なるほどと思いました。

「『ホモサウナ』にあった結婚式場は、何の目的で使われていたと思いますか」という、ちょっと漠然とした質問になるのですが、石田先生、いかがでしょうか。

（石田） 差し支えなければ、私のスライドのあの部分をもう一度映していただけますか。

何の目的で使われていたのか……設営されたのかというのは、その後の資料がないのでよく分かりません。というのは、このサウナ――「友愛会館」――は1，2年後には看板を下ろし、喜楽会館広島店に変わるのです。つまり、大きなチェーン店に吸収されてしまいます。

広告では「結婚式場」とは言っていますが、たいした設備はなかったのだろうと推測します。せいぜい、そこにステージみたいなものがあって、幕があって……ぐらいなものかもしれません。それでも願望も込めて「結婚式場」と呼ぶところに、何か意味があるのだと思っています。

この施設主が何をしたかったか。本当は分かりませんが、広告資料の中に、「正規従業員募集」として「軽度身障者も可」と書いてあります。なので、今の言葉で言うと、ノーマライゼーションのようなことを施設主は考えていたのかもしれません。「友愛」の名前もそれに関連があるかもしれません。もしどこかに、当時の事情を知っている方がいらっしゃれば、聞き取りをしてみたいとも考えています。

（満島） なるほど。何回見てもものすごく衝撃的な……。（笑い）「良き日ご予約お早目に」という（笑い）、ものすごく語呂のいい感じで、おしゃれだななんて思ったりもします。

私がとても印象的だったのは、東京とか大阪という大都市にこの友愛会館のようなハッテン場がポンとできたわけではないという点でした。大都市のはやりに乗って、試しにやってみようというかたちではないわけです。最近では同性婚の流れに乗って、ブライダルで同性パートナーも受け付けるというサービスが始まっていますが、地方都市よりも中心部のほうが盛んなビジネスとして採用されているように思います。この「良き日ご予約お早目に」がうたわれたのが広島だったというのが、すごいと思うのです。地方で発達していったこの文化のあり方に、すごくびっくりします。それで、「地方ゲイ」という話から、石田先生に質問が届いています。

「東京以外で専門ハッテン場が減少している理由というのは、何でしょうか。これは一極集中だけでしょうか。地方の人がみんな、リア充であるとは思えないのですが。むしろ専門ハッテン場でない場所は増えている気がします。地方人の見解ですが……」

今回は「専門ハッテン場」というところを石田先生に非常に詳しく紹介していただいて、そこで確保されていた「安心できる形」というのを分析していただきました。一方で、専門ハッテン場でない場所が地方に増えているのではないか、あるいは公共空間を転用したハッテン場といいましょうか、公園などのハッテン場というのはどういうものなのか。こうした点について伺いたいと思います。

（石田） まず、地方の専用ハッテン場が厳しくなっている理由として首都圏の一極集中化が作用しているのかどうかについては、私自身は割と本気にそう思っています。人口が多く匿名的であるほど専用ハッテン場は盛んになるといえます。

また、軒数については、東京の有料ハッテン場のあり方は他の地方と比べて特殊で、東京にはのれん分けシステムというのがあるというのを調査で聞いたことがあります。それは、売り上げで一定の成果を上げたら店を独立していい、というシステムが、90 年代のビデオボックスの時代からあったようです。90 年代以降、専用ハッテン場で働く従業員が頑張って独立し、現在は、資本のつながりはないながらも、複数の系列がゆるやかに存在しています。もちろん資本関係のある店舗同士もありますが、こうしたシステムがあるおかげで小さめのハッテン場がとてもたくさんあり、筋肉質で男らしい人しか入れない店とか、よく言えばすみ分けですけど、細分化が進んでいます。

これに対して、70 年代、80 年代にできた大型の鉄筋コンクリートのハッテン場、「ホモサウナ」と

呼ばれたところは、オールジャンルでした。しかし、オールジャンルだと手を出されたくない人にも手を出されて、若い人がなかなか足を向けにくい状況にもなっていました。そうした施設は 90 年代には老朽化が進み、一層若者離れが進むという状況があります。

では地方はどうなのかというと、今はむしろ公共空間の転用ハッテン場が増えているのではないかというご意見が先ほどありまして、確かにそのとおりだと私も思います。スーパー銭湯が出てきてから若干増えてきたように思います。合図や目配せをして、合意が成立したらたとえばどちらかの車で性交渉を行う、などがありますよね。ただそれよりずいぶん前の時代には映画館が主要の出会いの場所の1つであり、80-90 年代には映画館での出会いは顕著に廃れていました。2000 年頃には「ホモ狩り」という憎悪犯罪があり、特に首都圏でゲイ男性を狙った殺傷事件が繰り返され、公園でのハッテンもリスクが高い印象がもらされた経緯がありました。このため、映画館が廃れてスーパー銭湯がでてきて若干盛り返したけど、公園の出会いが減ったという少々複雑な経緯を経ます。現在は個室ビデオ鑑賞、DVD 鑑賞ですね。それは異性愛向けのアダルト向け店舗なのですけれども、そこで待ち合わせるというのが……ありがとうございます、うなずいていただいて。1つの重要な出会いの経路ですね。（笑い）　個室 DVD は、中都市にも店舗がありますので、そこがハッテン場の出会いに関する代替機能をいくぶん果たしているのではないかと思っています。

**（満島）**　興味深いお話をありがとうございました。

石田先生にはほかにも、ハッテン場が切り口にはなっているのですが、さっきの質問とすごく似たようなテイストの哀愁を感じる質問が来ています。

「ハッテン場は身分や年齢から解放された場と言うが、本当にそうか。イケメン、マッチョ、若さなどゲイコミュニティが礼賛する人はもてはやされるが、非イケメン、細い人、老人などゲイから性的魅力の乏しいとされる人たちは、排除されているのではないか」

という悲痛な感じの叫びであったり……。（笑い）　私は共感するところがものすごく多いのですけれども、そうした質問も来ています。

**（石田）**　はい、しっかり受け止めました。（笑い）　まさにおっしゃるとおりだと思っています。「ハッテン場というのは一切の差別から解放されていて民主的だ」というのは色んな人が書きたがることで、公共空間におけるハッテン研究の古典とされるラウド・ハンフリーの研究『Tearoom Trade』にも書かれていますし、三島自身も『禁色』に書いています。 多分、それはいくぶん、描き手のファンタジーだと思います。けれども、ファンタジーとしてそういうふうに言いたかったというのは、なんだろうとも思うんですね。本講演内容に引きつけて言えば、有料ではない公共空間の転用ハッテン場では、仲間同士でもいつ足元をすくわれるか分からないという危険な状況があったので、それに対して何らかの安全な空間……平等な空間というのを、描き手が理想として構築したのではないかと思っています。

確かに、ハッテン場で行われているのは、民主的な性交渉など何もなくて、そこでは年齢、体型などによる序列化、髪型、男性性などによる再序列化が起こっています。かつて専用ハッテン場には壁と壁の間に穴、通称「glory hole」が開いていましたが、その穴には栄光も希望も見えず、絶望しか見えないという思いを感じた方も多い（笑い）……かもしれません。

ハッテン場に民主的な形はない、そこでは何らかのファクターによる絶望的な再序列化は起こっているわけですが、ここ数年以来の東京のトレンドとして、仮面・覆面系のハッテン場が増えてきたという実態を挙げておこうと思います。仮面・覆面をつけたりかぶったりするととどうなるかというと、それら

なしでは「ちょっとこの人はタイプじゃない」「ちょっとこの人年いってて、NG」と思っていたのが、目じりのしわが隠れるなど、減点要素が少なくなるわけです。お互いがお互いにジャッジを甘くできる機能あって、仮面・覆面を取り入れた専用ハッテン場は、今、東京で５店舗以上あります。

これは匿名性を担保することにもつながるので、二丁目のバーで働いているなど、「顔がさす」人にも受け入れられていまして、その点からは、むしろ、大都市だけでなく、いつも同じ人しかいない地方の専用ハッテン場が導入すべきではないかとつねづね私は主張しているのですけれども（笑い）、地方在住者と観光客が覆面を通して……、みたいなことは、地方の専用ハッテン場は凋落傾向であると危ぶんでいる店長さんなどは、導入を考えてもよいのではないかと思っています。

**（満島）** 覆面あるいは仮面ハッテン場の話は色んな人から色んなふうに聞いています。私も東京に行ったら、ぜひ一度のぞいてみたいと思いました。札幌にもいつかできるといいですね、みたいな感じです。

石田先生のハッテン場のご研究については、控え室のほうでは打ち合わせができないぐらい盛り上がりました。（笑い） 石田先生のお話がどんどん膨れていってしまうので、ちょっとここでストップさせていただいて、清水先生、鈴木先生のご発表にかかわる質問を取り上げさせていただきます。

これは鈴木先生と清水先生の両方に共通する質問ではないかと思いますし、私もぜひ聞いてみたいと思っていることです。

「『ホモノーマティビティ』という単語が、今回のお二人の発表に出てきたように思います。ホモノーマティビティというのはどんなものとして考えたらいいのか。そして、ニュー・ホモノーマティビティというのは、一体どういうものなのか。説明してください」

私も発表をお聞きしていて、鈴木先生が言われるニュー・ホモノーマティビティと清水先生の言われるニュー・ホモノーマティビティはどこまですり合わせが可能なのか、ものすごく興味のあることでした。しかも、すり合わせができるのかできないのかによって、お二人の議論をつなげることができるのか、それともできないのか。これは、核心的なところにかかわってくるのではないかと思っています。そこで、ホモノーマティビティについてどのようにお考えか、清水先生からお話しいただけますか。

**（清水）** まず、ニュー・ホモノーマティビティとは何かというところからご説明したいと思います。「新しいホモノーマティビティ」という言い方を持ってきたのは、リサ・デュガンというクィア系の研究者なのですけれども、ホモノーマティビティという言い方自体はその前から、これは何となく、例えばゲイ・コミュニティとかレズビアン・コミュニティ、「ノーマティブ」というのは「規範的」という意味なので、コミュニティの中での規範について使われていた言葉だったと思います。ただそれとは違う意味で、新しいホモノーマティブな運動が出てきているという言い方をデュガンがするのが、2000 年代の始めです。このときにデュガンが何を含意しているかというと、一つは、この運動が新自由主義体制と非常に親和的であるということです。これはちょっとややこしいというか、区別を引くのはとても難しいのですけれども、資本主義だからだめというよりも、資本主義のある特定の形 ―― とりわけアメリカなんかでリバタリアン的な発想 ―― の中で、基本的に国家の力をなるべく小さくする。それで、個人の私的な領域の自由を拡大するというのが、新自由主義の方向性としてはあります。経済活動というのは私的活動です。なので、マーケットの自由というのを重視して、それに対して国が労働者の権利を守るために介入する、あるいは国が、「障がい者をこれだけ雇いなさい」「『LGBT の人を入れると、うちのお客が減るから入れません』なんてことを言ってはいけません」「女性を入れましょう」、みたいなことを言うのはおかしい、そこは私的な自由の領域であるべき、というのが、一つの方向性として新自由主義にあ




討論の様子

ります。それと非常に親和的な運動が出てきていて、それがニュー・ホモノーマティビティなのです。

具体的にはどういう方向性を採るかというと、基本的に国はほぼ何もしなくてもいい／何もするな、ということになります。LGBT の運動というときには、それまでは常にメンバーの多様性を念頭におくべきと言う理念があった。レズビアンにも色々いる。ゲイにも色々いる。白人のゲイとノンホワイトのトランスだったら、平均すれば経済的な状況がかなり違う。そういう違いを全部含んで初めて LGBT のための運動だろう、という発想がずっとあったわけです。それに対して、「そこはもう自由。そこには介入する必要はない」という話をし始めるのが、ニュー・ホモノーマティブの運動です。自由さえ与えてくれたら、あとは自分の力で人生を切り開いていくので、わけの分からない超保守的な差別だけしないでくれればいい、と。すると、どこまでを「超保守的な差別」と取るかという話になります。そこで大きく出てくるのが、なぜか従軍の権利と婚姻なのです。それで、婚姻さえさせてくれれば、あとは自分たちの私的な領域での活動への制限 —— 例えば、ゲイバーに手入れが入るとか —— がなければ、それ以上のことはしなくていい、という方向に持っていく。それに対して「いやいや、ちょっと待ってください。レズビアンのシングルマザーが有色人種の中ではこれだけいるのです。この人たちのことをちゃんと考えないと LGBT コミュニティのためになりません」という話が出てくるときに、「そんな支援はコミュニティの足を引っ張るだけなので、そう言うことを言い出す左翼は無視しましょう」ということを主張するグループが出てきます。デュガンがニュー・ホモノーマティビティとして批判するのは、このような運動のことです。

実はこれはエイズ・ポリティクスのときからきっかけがあって、そこは石田さんの話とつながります。エイズ運動について、クィア系に繋がる流れの中でどちらかというと異性愛主義に対し強く反発するものだった、というところを中心に、今日はお話をしました。けれども当時一部には同時に「こんな目に遭うのもゲイ男性である私たちがこんなにも不道徳に乱交を続けていたからである。私たちも異性愛者と同じように、きちんと礼儀正しく、立派な市民として活動をしていきましょう」と言う人たちが出てくるのです。

このような発想はニュー・ホモノーマティビティとつながっていて、ニュー・ホモノーマティビティの運動が同性婚だけをとりわけ推進していくのは、「私たちは乱交的な卑猥で卑劣なゲイではなく、一人のパートナーと家族を築いて一生を過ごし、家族に対して責任を持つ人間なのだ」と言う主張に裏付けられている。この主張は実は、新自由主義的な福祉予算削減の話とつながっていて、私的領域として、

家族は家族の中で面倒を見るべきである、と。裏を返せば、子供がいるとか、だれかが病気になったとか、シングルマザーだということで、国に迷惑をかけてはならない。

そういういわば家族主義や保守的な性道徳観だの、自己責任論だの、国家が再分配機能を果たすことへの新自由主義的な忌避だのが一つの動きになっていくのが、ニュー・ホモノーマティブな運動と言われるものです。だから、日本に関してニュー・ホモノーマティビティと言われる時も、やっぱり基本的には、ある特定の異性愛的な道徳観とか家族観ということを重視するというのが一つ、大きくあるだろうと思います。

ゲイでもレズビアンでもいいのですけれども、そのコミュニティの中にはそれこそ死ぬまでスワッピングをしながらやっていきたいみたいなセクシュアルな実践を追求してきた人たちもいるわけですけれども、それに対して「ああいう人たちがいるから困るんだよね、私たちは、愛し合った一人と結婚して、できれば子供も作って、やっていきたいだけなのに」と言う話が出たりする。やっていきたいというのは個人の自由なので構わないのですけれども、そこでだめな人を切り捨ててしまう動きが出てくるとき、それはデュガンが言ったニュー・ホモノーマティビティに近くなっていくだろう、と。さらにそれが、とりわけ経済的な合理性というのを理由に、あるいは市場の自由を理由に、何らかの形の国家福祉、保障といったものを切り捨てる方向で議論が進むとしたら、それはニュー・ホモノーマティブな運動と言えるだろうと思います。

何でもかんでも企業が入ったらニュー・ホモノーマティブというわけではありません。ただ、もちろん企業の論理と人権擁護や社会保障の論理が違うときはあるので、その違いをどのように調停していくかということは重要にはなりますけれども、日本ではそういう感じだと思っています。

**（満島）** 明晰なご説明、ありがとうございました。

鈴木先生はいかがでしょうか。

**（鈴木）** 私はクィア理論の研究者ではないので、概念を確定することにあまり関心がありません。ですから、ニュー・ホモノーマティビティとは何かを追求することには関心がないのですけれども、30 年ぐらいこの運動にかかわってきて感じることは、この数年でしょうか、明らかに新しい潮流が出てきています。色んなことがあるのですけれども、例えば日本人と同性カップルの関係にある外国人に対して在留資格を与えなさい、という運動をしていますが、その中には大企業が優秀な人材を獲得するために……要するに、人材獲得競争が国際的に展開されている中で、日本だけが同性カップルにビザを出さないということは、国際競争上、日本は不利になる、という論理を使って、国や大企業に対する説得をしようとする人がいます。そういう人たちの議論には、人権とか人間の尊厳といったことは全く出てきません。つまり、そこにあるのは、「日本の企業の競争力」という論理なのです。

例えば自民党の政治家に外国人のビザの問題を話しに行くときに、人権とか人間の尊厳、あるいは「家族を持つ権利」とか「だんらんをする権利」というふうに言っても、話は全く通じないのです。人権という言葉を出したら、マイナスにすらなるのです。彼らの耳は閉じてしまうのです。そのときに大企業が、「より儲かる」という話だと、ぐっとくるわけです。（笑い） そういう人たちに話を聞いてもらうためには、その人たちが好きな論理を使うしかないという面は確かにあると思います。

それから、大企業に働いている人だったり、あるいは大企業相手の渉外弁護士さんたちの団体とか、そういう人たちは国際競争力論を使いたがります。その方面からは、僕も言われるのですけれども、「LGBT の運動家は服装がラフ過ぎる」というわけです。（笑い） 議員や財界の人と交渉に行くと

きは、「ちゃんとスーツを着て、ネクタイをして来てもらわないと困る」といったことを、僕にも言う人がいるわけです。つまり、「左翼の運動家スタイルではだめ」ということです。「エリートサラリーマンの格好をして来てもらわないと、説得力がない」みたいなことです。だから、そういう新しい論理といいましょうか理屈づけで、あるいはテイストで要求を通していこうとするときの戦略として使ってもいいのではないかと思っています。けれども、それに支配されてしまってはまずい。そうした論理を戦略的に動員することで、物事が進むのだったら、それも一つの手なのだろうと思います。

この間、香港で、同性カップルのビザを出すという政策を決めました。香港政庁が出しているステイトメントを見ると、「香港は経済都市である。したがって、優秀な人材を集めなければいけない。だから、同性カップルだからといってビザを出さないのでは、香港は経済的に不利になる。だから、ビザを出すことにします」とあり、「これは同性婚を認めるということでは全くないのです」ということが、わざわざ書いてあるのです。香港というところですからまさにそうなのだけれども、そういう論理は自民党の政治家や、経団連などの経済団体にも通じるところがあります。だから、論理を色々と使い分けて、そういうことが有効なところには、それを前に押し出して対応したらいいのではないかと思います。でも、それをまともに信じ込んではまずいと思います。それはあくまでも方便にすぎないと割り切れば、それほど毛嫌いすることもないかと思っています。

**（清水）**　おっしゃっていることは分かります。けれども、その話が出てきたときにいつも私自身どうしても理解できないというか難しいと思うのが、同じことが女性に関しても言えるはずなのです。日本は80年代に女性に関して同じことをやろうとして、いくつか法律を作り、「男女のジェンダー差をなくさないと、経済的に不合理」と言ったのですけれども、結局日本の人も自民党も実際に今まで、「別に不合理でもいいのです、差別したいので」という方向で来たわけですよね。今、「女性活躍」と言っていますけれども、別に「差別をなくす」という話をしているわけではなく、「不合理な中で頑張ってお金を稼いでね」と言っているだけです。（笑い）　その経験と照らし合わせたときに、経済的合理性を利用する戦略というのをどう考えればいいのか、ということはどうしても気になります。

LGBTの話にしても、そこでトランスの女性であったりレズビアンの女性であるというところはどうなるのか。そこはやっぱり、非常に強く感じます。だから絶対にできないというわけではなくて、もしかしたらそこが突破口になるのかもしれないし、ならないかもしれないのですけれども、そこをどう調整して考えたらいいのだろうかということは、私は今も考えていますし、自分で分からないというか、結論が出ていないところです。

**（満島）**　ありがとうございました。活発に議論が交わされる感じで、聞いていてドキドキするような感じだったわけでございます。（笑い）　残り時間が2～3分という感じです。もうこんな時間になりましたけれども、皆さんの質問について、できるだけお聞きしていきたいと思います。お三方に来ているご質問です。

「今回の発表の内容はすごく面白かったのだけれども、取りざたされていないジェンダーがあるのではないか」

ということで、質問が二つほど来ています。

「Xジェンダーであるとか、クエスチョニングというものについての分断とかつながり……今回はG中心で、トランスとGIDがほとんど出ないのはなぜか」

ゲイの人というのはゲイ・コミュニティというのが存在していて、ものすごくつながりが作りやすいとい

うところがあると思います。ところが、X の人などはコミュニティを形成すること自体が難しいというところもあって、つながりを作るということについてはすごく興味を持っているのですけれども、こうした点について鈴木先生はどうお考えでしょうか。

**（鈴木）** 私の話はそんなに G 中心ではなかったと思いますけれども、とかくそういう批判を受けます。特に T の方々からは、同性愛者中心の運動になっている、とよく言われます。ただ、LGBT という概念が出てきてから、私は少し変わってきたと思っています。もっと以前は、やっぱりほとんど同性愛者のことしか考えていませんでしたけれども、LGBT という概念が出てきて、T の方々のことを私は考えるようになりました。それから、T の人や、X ジェンダーや Q の方々とも共通の基盤はあると思い始めましたから、昔よりはだいぶよくなったと思います。いずれにしても、性的な自己決定を妨げられている人たちの集団なのだという点では共通していますから、一緒にやっていきたいと思います。

ただやっぱり、自分が G なので G の話が多くなるというのはしょうがなくて、むしろ X や Q の活動家が出てきてこういうところに登壇して話をするということになっていけば、そういう人たちの情報も提供されるようになりますから、いいのではないかと思います。

それから、アイデンティティ・ポリティクスとしては、どこまでアイデンティティを細分化していけばいいのか、という話になりがちです。最近、SOGI という新しい概念が出てきていて、これだと必ずしもアイデンティティの中に閉じこもる必要はないわけです。もっと流動的だし、曖昧なものであるということは当然そうなわけだから、そういうものとして理解していくというのが、今後の方向性などだと思います。そういう意味では、LGBT よりも SOGI のほうがいいのかもしれません。概念のまとめ方を再考すべきかもしれません。

ただ私個人としては、「LGBT+」と書いたのは、そこに色んなものが入ってくるということを想定し、それらを排除しているわけでもないし、主観的には別に G 中心にやっているつもりはないと意味です。

**（満島）** 同じ話題について、清水先生はいかがでしょうか。

**（清水）** 「Q」というのは Questioning のほうの Q でしょ？といったことを確認していたのですけれども（笑い）。

**（鈴木）** 両方あるのですよね。

**（清水）** そうなのです。私は基本、Queer なので、Questioning ではないのですけれども。別に、「私はクィアだろうか」と思っているわけではないので……。ただ、LGBT に対して Q とか X……何でもいいのですけれども、すごくいっぱいつけるというのは、昔からあったやり方です。私は、自分にぴったりくるアイデンティティが欲しいと思う人がそれを追求することはもちろん構わないと思うし、同じような感覚を持った人が集まることももちろん構わないと思っています。ただ、実際に細かく分け始めると、どこまで行ってもさらに細かく分けることができる。延々と続くのです。延々と続くということを理解しているという表記の仕方が、もともとは「LGBT+」でした。つまり「+」というのは要するに「全部書くことはできないですよ」というサインだったわけです。「LGBTs」などもそうです。そこがまず大事なところです。

では何でそこがまとまっているのかというと ―― これはクィア系の発想なのですけれども ―― 私は別に、レズビアンとかゲイ、トランスセクシュアル、バイセクシュアルなどの人たちのことを専門的に考えようとは全く思っていません。私が考えたいのは、異性愛社会がどういうふうに動いているか、なのです。あるいは、シスジェンダーの性別二元論社会がどういうふうに機能しているか、ということが私の考え

たいことです。鈴木さんが最初におっしゃったことで言うと、敵はそこなのです。異性愛者ではないですよ、異性愛社会です。異性愛社会とか、シスジェンダーの社会とか、その社会の主流のあり方がどういうふうに機能しているのかということを考えるほうが、大事だと思っています。

なので、個別にQとかXとか、もちろん色んな可能性がありますし、面白かったりもします。Xなどはかなり新しいカテゴリーで、日本にしかないアイデンティティだったりします。日本にしかないからだめかというと、もちろんそんなことはないし、Xと言っている人たちの構成は2000年代の頭と今とではかなり違う気がしますけれども、それもそれでいいのです。ただ同時に、例えば自分がXである――別にそれはLでもGでもTでもいいのですけれども――というのは重要だし、そこを言っていくのは構わないと思うけれども、Tとは何か、Gとは何か、Lとは何か、Qとは何か、Xとは何かといった話にあまりにコミットしてしまうのは、必ずしも生産的ではない気もしています。

レズビアンは、というか女性はと言ってもいいのですけれども、基本的にはそれは70年代ぐらいから死ぬほどやったわけですよね。女性とは何か、レズビアンとは何かとか、運動でも文学でも、哲学や理論でも死ぬほどやったのですけれども、はっきりしたところにはたどり着かない。死ぬほど考えていった結果として、トランス女性は女性ではない、などと言いだすことにもなって（笑い）論外だろ、みたいな話なわけです。だから、もちろん「自分はこれ」と思うのはいいけれども、〈これ〉が何かというボーダー・コントロールを徹底していくことには、あまり力はない。かといって「みんな違って、みんないい」と言っても、何にもならないではないですか、政治的には。（笑い）　だから、「自分はなんであるか」というところに集中するよりは、まず敵をはっきりさせよう。敵は異性愛社会。敵は性別二元論。そこがポイントではないかと、個人的には思っています。

（満島）　石田先生からも……。

（石田）　私のテーマが限定的なのでお答えがすごく難しいのですけれども、コメントを試みますね。まず今回、欲望の形を論じさせていただいたことからすれば、例えば覆面などのある種の欲望の掬い方は、ある人々には僥倖だけれども、その新しい欲望の供給の形から疎外される人々、分断も生じます。それはとりもなおさず、受容され、定式化される欲望が貧困であることの表れだとは思っています。私の研究自体は歴史実証系なので、有料ハッテン場について、トランスの方たち関して何が言えるのかということをちょっとだけ補足させていただきます。

昔の有料ハッテン場には今より女装者や、男性的身体を必ずしも持たないあいまいな性の方が入れました。しかし現在はそうした可能性がどんどんと少なくなっていっています。それはゲイ・バイセクシュアル男性の多様な（しかし男性的な）嗜好が有料ハッテン場のコンセプトや入場制限を先鋭化させていって、それぞれの店舗の独自のカラーの営業を成り立たせていったことと関連があります。かつて、レンタルスペース型の着衣の有料ハッテン場には、トランス男性とかXジェンダーの男性で、性的な指向は男性、自分の身体に違和感はあるので特段他人からしてほしくはないけれど、してあげるのは満足という人が入れました。しかし、90年代後半からだんだんと、着衣系ハッテン場が脱衣系にコンセプトを変えることで、そうした人々の行き場所はなくなりつつあります。

しかしそれだけの話ではなくて、おそらくは関連法規との関係もあると思います。昔の「ホモサウナ」系のハッテン場は旅館業法下にありましたので、伝染病などの定められた理由以外では断ることができない状況でした。しかし現在のレンタルスペースとして届け出をしている業態ですと、その法律のもとにないために、断ることができる状態になっています。よって、排除を語るときには、法律などの制

度的な問題との関連を論じる必要があると思います。

**（満島）** 控え室でも、女装でのハッテンについての話などは私にはすごく気になるトピックで、すごく面白いものでした。もっともっと聞きたいところなのですけれども、そろそろお時間がやってまいりました。ここで、閉会のほうに流れていきたいと思います。

最後に、今回発表していただいた三人の先生方から、一言ずつ頂きたいと思います。

まずは鈴木先生からお願いします。

**（鈴木）** もうたっぷりお話をしましたので特にありませんが、コミュニティの中の方々に対しては、けんかをやめて、共通の敵との闘いにエネルギーを集中していただきたいと思います。足の引っ張り合いはやめましょう。（拍手）

**（清水）** 足は引っ張らずに、批判はきっちり。私はこれでいきたいと思います。

あと、役目が違うというのは、やっぱりあると思っています。例えば、活動家がやらなくてはいけないことと当事者がやること、あるいは研究者がやること、政治家がやることというのは、重なっていますけれども少しずつ違います。それで、お互いに批判をしていくべきだと、私は思います。コミュニティの中で、けんかではなくどれだけ議論が交わされるか。それこそののしり合いではなくて、どれだけ意見の違いとか立場の違いというのをきちっと話していけで……同意しなくてもいいのです、そういう話もあるなと頭の片隅に留めながら次に行くかそうでないかというのはけっこう大きいと思うので、それはもうちょっとやっていくべきではないかと思います。

あとは宣伝で、皆さんはいらっしゃらないと思うのですけれども、実は毎年秋に東京で「クィア理論公開講座」というのをやっています。年に 6 回連続でやっていて……

**（満島）** ツイッターで拝見しました。

**（清水）** そうなのです。もし東京においでで、たまたま時期が重なっているという方がいらっしゃいましたら、ぜひいらしてください。

**（満島）** メチャメチャ行きたい。

**（清水）** よろしくお願いいたします。（拍手）

**（満島）** 石田先生、お願いします。

**（石田）** まずは、このテーマでアカデミックなこの場に呼んでいただいたことに、すごく感謝申し上げます。ありがとうございます。

こんなことを私から言うのもなんですが、歴史というのは現在の私たちのあり方を相対化する重要な一つの手がかりになります。思考実験も大切ですが、思考実験のみで SNS でマウントの取り合いをするのではなくて（笑い）、多くの人が歴史をたどることを通して、データに基づいた議論を深めていくことがもっと広まっていけばと思っています。（拍手）

**（近藤）** ありがとうございました。

最後になりますが、本日の司会を務めた斉藤さんと満島さんの二人は、昨日の「さっぽろレインボープライド」の実行委員でもありました。まだ気分が高揚しているのではないかと思うのですが、何か一言あればお願いします。

**（斉藤）** パレード後には、アフターパーティと呼ばれる夜通し行われるクラブイベントがあり、これも私たちの主催でしたので、それが終わった今朝 6 時ごろに 2 人とも家に帰って、2 時間ぐらい寝て、またここに来るというハードスケジュールでした。

**（満島）** 朝まで女装していました。（笑い）

**（斉藤）** 体力など大丈夫かな、という感じで来たのですけれども、無事にみなさんと議論が行えてホッとしております。せっかくなので最後にもう一度、今回のテーマについて思ったことを簡単にお話しします。

お三方には「『LGBT』はどうつながってきたのか?」というテーマでお話しいただいたのですが、昨今のLGBTの主流化という流れの中で、LGBTという言葉は頻繁に使われ始めています。ですが、皆さんのお話の中では、LGBTとしてつながっているというよりは、LGBTとしてはつながっていないけれども何かしらの形でつながっているというお話がとても多かったのではないかと思います。色々な具体例をお話しいただいたわけですけれども、その中ではLGBTという言葉の限界がよく表れていた印象も受けました。それでも私たちは、今回のテーマのLGBTという言葉を普段から素朴に使っているわけですが、それがどういうときに有効でどういうときに限界があるかということを考えながら使用し、議論を進めていくことが大切ではないかと、改めて感じさせられました。皆さん、ありがとうございました。（拍手）

**（満島）** 寝て起きたときは、まだ顔にファンデーションが残っておりました私ですけれども、この間は地震があり、昨日は「台風直撃」と言われていて、パレード自体できるかどうか心配で、ものすごく悩みました。この関連イベントのほうもできるだろうか、と打ち合わせのときにものすごく懐疑的な感じでした。まずはこうして無事に開催させていただき、たくさんの方にお越しいただきましたことを、本当に心から感謝申し上げます。ありがとうございます。

今回はさっぽろレインボープライド実行委員ということでプライドパレードにかかわることになったわけなのですが、かかわることになったときに最初に思ったのが、今までのパレードでやれなかったことをどうしてもやりたいということでした。そこで、自分の大学のときの担当教員で、色々と勉強させていただいた近藤先生のことが思い起こされました。

今までのパレードのことを振り返ると、パレードというのは、つながっていこうという形でその場に集まった人みんなが思い思いのことを考えながら、一緒に歩きます。つながっていこうという形はあったかもしれないけれども、つながりそのものをもう一度考え直していこうという試みはありませんでした。そんな中、自分が育った北海道大学でそうした学術的なイベントは企画としてなかったことに思い当たりました。実はこの3人でセクシュアリティ研究会というのをやっていて、去年も北大で研究発表をさせていただいたのですが、私のプランを持ち込み企画みたいな感じでお話しさせていただいたところ快く了承していただいて、このような形で開催することができました。今日の開催に至るまでは大変だったような気もしますが、思ったより早く実現することができました。でも今は、開催できたという実感があまりありません。パレードをきっかけに、つながりをもう一度考え直すきっかけを、こういう形で色んな人にかかわっていただきながら作ることができたというのは、すごくうれしく思います。

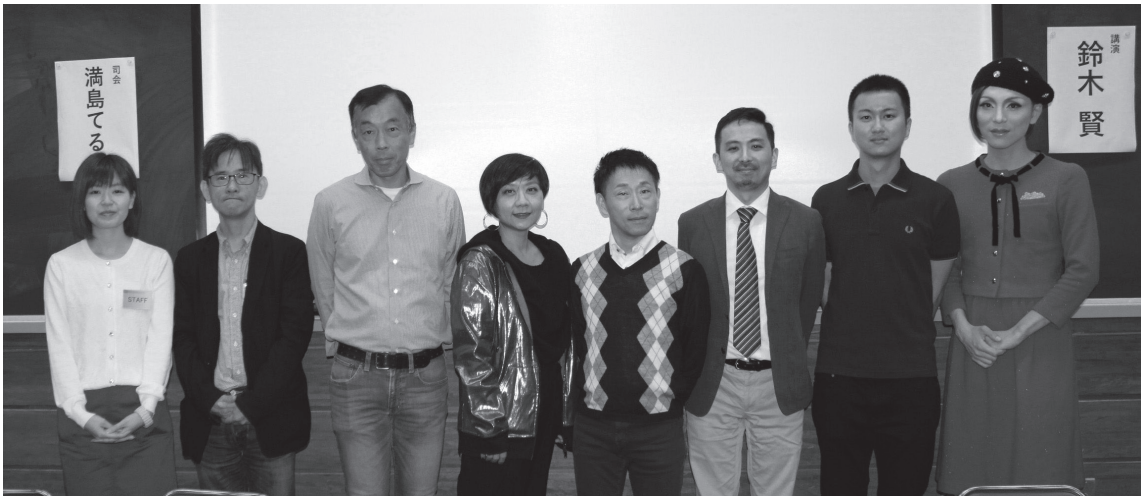
今回は、鈴木先生、清水先生、石田先生、遠いところからお越しいただいて、本当にありがとうございました。

そして、応用倫理・応用哲学研究教育センターの皆様、ご協力いただきありがとうございました。最後にはもう、感謝の言葉しかありません。皆様、今日はおつきあいいただきまして、まことにありがとうございました。（拍手）

**（近藤）** ありがとうございました。満島さんの修士論文のテーマはプラトンの哲学でしたので、今回はその研究の成果が生かせたのではないかと思います。

**（満島）** もう忘れました。（笑い）

**（近藤）** これにて、公開シンポジウム「『LGBT』はどうつながってきたのか?」を終えたいと思います。講演者の先生方に、改めて感謝申し上げます。（拍手） また、お越しいただいた会場の皆様も多くの質問をお寄せいただき、まことにありがとうございました。（拍手）




左から 柴田絵里佳、蔵田伸雄、鈴木賢、清水晶子、石田仁、近藤智彦、斉藤巧弥、満島てる子（敬称略）